

みなと

今・むかし新聞

創刊号

二〇〇四年 夏

港区の今昔を伝える

新聞を発行します。

港区立生涯学習センターでは、三年前の夏から港区の今・昔を伝える「語り部の会」養成の学習会を行ってきました。メンバーは、上は八十二歳にもなる年配の方々です。去年は港区の御成門小学校、芝浦小学校などに招かれて、三年生、六年生の児童の皆さんに昔のことをお話しました。

今回、語り部学習会の参加者が伝えたいと思っていること、歌や古い写真や生活で使った道具のこと、忘れられない体験などを新聞の形にして発行することにしました。これを読む皆さんに今とは違う昔の港区の各地域の様子、そこでの生活の様子をよく分かってもらったり、昔を思い出すきっかけにしたいと思っています。

「しんばし界隈の昔を振り返る」

開催しました！

今年の三月十九日、新橋駅そばの港区立生涯学習センターで「フェスティバルーン」というお祭りがありました。その一角で「しんばし界隈を振り返る」というテーマで昔のことを思い出して語り合おう、という会が開かれました。会場には終戦

震災（だいし）の写真、戦争の時に戦地へ出ていく兵士を送ったのぼりの実物などが展示されました。午後三時に始まりました。会場は参加者でいっぱいになり、椅子も足りなくなりました。



大盛況だった今年3月のフェスティバルーン

桜田小学校の古い卒業生で、学校の前に「むさしや」という和菓子屋を営んでいたという八十六歳になる男性が、関東大震災の時の体験や新橋界隈の街の様子について元気な声で語ってくれました。語る人自身が体験したことなので、話も力強く感じられます。多くの人が聞き入り、会場は熱気が満ちて、次々と語る人が続きました。最後は威勢（いせい）のよい三本じめ。力強い手締（てぢめ）で会は終わりました。

鉄道唱歌

なつかしいうた



皆さんは「鉄道唱歌（てつどううた）」を知っていますか。日本全国の鉄道を歌った歌で年配の人なら初めの方は歌詞（か）を見なくても歌えます。大和田建樹（おおわだ たてき）が作詞、上真行（うえまこと）と多梅稚（おほのめ）がそれぞれ別の作曲をしましたが、多くのメロディ（メロディー）の評判（ひょうばん）が良く、大流行しました。

一、汽笛（きてつ）一声（いっせい）新橋（しんばし）を

はや我（われ）汽車（くるま）は離れた（はな）り

愛宕（あたご）の山（やま）に入り（い）る

月（つき）を旅路（りょろ）の友（とも）として

二、右（みぎ）は高輪（たか）泉（いづみ）岳（だけ）寺（でら）（せんがく）

四十七士（しちじゅうしち）の墓（はか）どころ

雪（ゆき）は消（き）えても消（き）えのこる

名（な）は千載（せんざい）の後（ご）までも

三、窓（まど）より近く品川（しんがわ）の

台場（だいば）も見（み）えて波（なみ）白（しろ）く

海（うみ）のあなただにうすがすむ

山（やま）は上総（さげ）（か）房州（ぼうしゅう）（ほうしゅう）か

ここから先は品川区や大田区です。日本全国を歌った「鉄道唱歌」の一番から三番までが港区ということは、港区が文明開化（ぶんめいかい化）の先頭（せんとう）を走（は）っていた何（なん）よりの証拠（しんこ）だと思（おも）いませんか。

（宇田韶夫（うた したる） 七十歳

昭和二年（しやうわ じに）～三二年頃 麻布台在住（あさふだい じゆう）

通説「新橋開通が一番は間違（まちが）い!？」

それでは、実際に一番はじめに汽車が走ったのは、どこなのでしょう。鉄道が開通したのは、新橋と横浜間（よこはま）からだということがよく言（い）われ多くの人がそう思（おも）いこんでいます。しかし、実は一番最初は品川（しんがわ）川（がわ）崎（さき）間（ま）なのです。鉄道をつくるという政府の考えでは当初（しんじう）から新橋と横浜間（よこはま）が候補地（こうほち）になっていましたが、品川駅（しんがわ）付近（ふきん）は、陸（りく）軍（ぐん）の軍用地（ぐんようち）を横（よこ）切（き）らなければならなかったのです。そこで政府（せいふ）はもつと南（みなみ）の海岸（かいがん）ぎわを埋（う）め立ててレール



関東大震災直後の芝浦 仮魚河岸（かりいさなべ）の様子 資料提供・松本トミ子氏

写真右手が船着場、中央にある車が「大八車」。写真の場所は現在の芝浦一

丁目と海岸三丁目の間にかかっている浦島橋の運河付近。

一枚の写真から

芝浦の魚河岸



私の父は、日本橋の魚市場で「伏平（ふしへい）」という魚問屋をやっていました。魚市場は江戸時代から

を敷（き）くことにしたのです。これが、思いのほか難工事。とりあえず工事が完成した、品川（しんがわ）川（がわ）崎（さき）間（ま）において試運転（しじゆん）をかねて開通（かいとう）させました。これがまさに日本の鉄道の歴史の第一歩。明治五年五月七日のことでした。一日に二往復、片道を三十分で走ったと言われています。約四カ月後（ご）によりやく新橋と品川間（しんがわ）も開通し、明治五年一〇月一五日に正式（せいし）に新橋（しんばし）（場所（ばしょ）は今の汐留（しおど））と横浜（よこはま）の桜木町（さくらぎまち）（駅（えき））間（ま）が開通（かいとう）しました。

（中嶋弘（なかじま ひろし） 七三歳 平成六年頃まで汐留（しおど）在住（じゆう））

日本橋にありましたが、大正十二年九月一日の関東大震災でメチャメチャになり、九月十七日から十一月三十日まで芝浦に移って、焼け出された人たちに品物を送り続けたのです。写真には、荷揚げをする船着場付近の問屋(もんや)に買い付けに来てにぎわう人々や、魚や貝の入ったタルや木箱を

一杯積んだ荷車、大八車(たいはち)やリヤカーなどが写しだされています。二カ月半の間、芝浦海岸は仮(かり)の魚河岸(うしあ)としてにぎわいましたが、十二月一日には休み、二日には日本橋に戻らず、築地(つくじ)に移って今日まで続いています。

(松本トミ子(まつもと ともこ) 芝浦在住 八一歳)



大空襲(だいくう)の日

戦争中(昭和二十年)三月十日の「大空襲の日」新橋付近の被災のすごさを目の前にしました。そのときは、学童疎開(がくどうそくかん)で、芝区の児童は、栃木県の塩原(しほの)・鬼怒川(きどがわ)の温泉地に疎開をしていました。(二年生から六年生まで)六年生は卒業のため、二月の末に、疎開地より帰京していました。私は六年生の担任でしたので、児童と一緒に帰っていました。

私の家は、赤れんが通りの延長した愛宕(あだ)警察署のすぐ近く通りに面した所にありました。深夜の空襲警報。空襲は、すぐ近くの様子、防空頭巾(ぼうくうずかみ)の身支度をしっかりと家の前に出ると新橋方面が燃えている。まっ赤な空、だが私の家のかたわらに桜川小学校の校舎があり、目の前には、芝浦方面のまっくらな空から、一機、続いて一機、ちよつと大きな鳥が翼(は)を広げて飛んでいるように見えた。B29、次々と切れ目なく見えてくる。あつという間に赤れんが通りの道路の上にろうそくを並べたように焼夷弾(しょういだん)が落とされ、火の手が上がっていききました。

警報が解除になると同時に、焼けている建物の前を走るようにしてかけぬけると、桜田小学校の同級生の家もありましたが、焼けあとには友の姿も人の姿もありませんでした。桜田小学校は大丈夫、次は南桜小学校です。日比谷通りの電車道路をわたると、南桜の付近は焼けていませんでした。疎開地の子どもの家も、六年生の家も家族も無事だと胸をなでおろしました。

(後略)

(廣畑美恵(ひろはた みえ) 当時新橋在住・元小学校教員・八二歳)



赤坂潮池附近 右方の建物は米国大使館 (石川光陽撮影)

出典『戦乱と港区』 P154～P155 港区立三田図書館 昭和44年

生活の道具 洗たく板

が終わることを自動洗たく機になった皆さんは知らないようでした。

現在では洗たく機が全家庭に普及(くわい)し衣服の材質も合成繊維(せいんせんい)が多くなりそれに合わせた洗剤、洗いができました。しかし、汚れている部分や汚れの様子材質によって、もみ洗い、つかみ洗い、押し洗いなど使い分ける必要があり、まだまだ、たらい、洗濯板があると便利なのですよー！

(宇和島常子(うわじま ときこ) 六六歳 台場在住)



〜編集後記〜

港区の子どもたちにも地域の昔のこと、おじいさん、おばあさんがどんな生活をしてきたのかを知ってもらいたい、という気持ちから、この新聞の文章は小学校の高学年でも読めるように気をつけて書いています。本で読んだ遠い昔の出来事だと思っていた歴史が、その日、その場所に生きていた人の口から語られると、自分もその場所にいたような生々しさでよみがえります。皆さんのすぐそばにもそんな人がいないでしょうか

皆さんご自身、あるいはご親類お友達がご存知のお話がありましたら、お気軽にお知らせください。

また毎月第二・第四水曜日に開かれる学習会にも、お気軽にお出かけください。お待ちしております。

学校の総合学習の授業や、地域のイベントにもお役に立ちたいと思います。ご連絡ください。

問合せは3431・1606 生涯学習センターまで 次号は来年一月に発行予定です。お楽しみにー！

発行 港区立生涯学習センター

平成一六年七月一日